

氏名(本籍)	なか ざわ のり こ (千葉県)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博甲第4204号		
学位授与年月日	平成19年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	江戸語にみられる非標準的長母音形式の変遷		
主査	筑波大学教授	博士(言語学)	坪井美樹
副査	筑波大学教授	博士(文学)	湯沢質幸
副査	筑波大学助教授		大倉浩
副査	筑波大学助教授		橋本修
副査	筑波大学講師	博士(言語学)	那須昭夫

## 論文の内容の要旨

本論文はこれまでの日本語史研究において実態の調査・報告が多くなされていた近世江戸語の接続母音の長母音化について、言語変化の観点から体系的な変遷として把握し直すとともに、変化の過程における遅速や偏在の実態を、話者の階層や標準形式と非標準形式、威信形の関与といった社会言語学的観点から解明した論文である。

本論文の構成は以下の通りである。

### 序章

- 第1章 本論文で用いる術語の規定
- 第2章 先行研究
- 第3章 江戸語にみられる否定助動詞ヌとネエの対立
- 第4章 『春色梅児誉美』における否定助動詞の研究
- 第5章 e:形式漢語名詞の縮小

### 終章

序章では、「江戸語における接続母音形式(ai形式)とそれが長母音化した長母音形式(e:形式)との対立の変遷とその要因について考察する」という、本論文の目的が提示され、その意義及び各章の構成が述べられる。第1章では、「接続母音の長母音化」や「言語変化」、「否定助動詞」など、本論文で用いる術語の規定を先行研究に基づいて行う。そして第2章では、江戸語における接続母音の長母音化に関わる先行研究を示し、先行研究でなされた記述及び分析を吟味し、先行研究にはどのような課題が残されているかを述べ、社会言語学的観点に立つ本論文の位置づけを行っている。

第3章から具体的な考察がなされ、まず江戸語の代表的資料である『浮世風呂』『浮世床』を調査し、否定助動詞の非対称的な対立(ヌとネエ)の成立に至る過程とその要因について考察する。調査の結果、「あ

ぶない」や「大学（だいがく）」など否定助動詞以外の言語的環境では、標準形式として ai 形式を、非標準形式として e: 形式を用いているのに対し、否定助動詞においては非標準形式であるネエに対立する形式としては、ai を含むナイが見込まれるが、実際にはナイの使用が殆どみられず、ヌという上方語由来の否定助動詞が用いられていることを明らかにする。次に、『浮世風呂』『浮世床』より前に成立した洒落本群においては、否定助動詞ではヌとナイが用いられていることを確認し、『浮世風呂』『浮世床』のヌ対ネエという対立の背後にある変化の過程について、

接続母音の長母音化が起こる以前には、ヌ対ナイの対立があり、ヌが上層話者が使用する標準的な文体に、ナイが下層話者が使用する非標準的な文体に現れる要素として対立していた。接続母音の長母音化という音変化が広範囲に起こると、ナイが長母音化した新形式ネエができた。この e: を含むネエが否定助動詞以外の言語的環境と同様に非標準的な文体を担うようになると、ナイは非標準的な文体を担う働きとしてはネエと衝突し、標準的な文体を担うにはヌと衝突するためヌとネエという変則的な対立が生じた。

という文体的側面での衝突という観点から説明を試みている。さらに、否定助動詞の変則的な対立が生じた要因には、「ヌが有する上方の威信」の関与があり、上方の威信が『浮世風呂』『浮世床』に反映された江戸語社会においても必要とされていたことを指摘している。

第4章では、『春色梅児誉美』を用い、『浮世風呂』『浮世床』に反映された言語より後の江戸語の否定助動詞の使用実態に着目し、否定助動詞の対立の変遷を考察する。調査の結果、『春色梅児誉美』では、『浮世風呂』『浮世床』において殆どみられなかったナイの多用が特徴的であり、ナイはほぼヌと同数の使用がみられ、その使用状況をみると、男性はヌとネエの使用に偏り、女性はネエに対立する形式としてヌとナイを使用していた。『春色梅児誉美』におけるヌ対ネエ、ナイ対ネエの言語様相は、『浮世風呂』『浮世床』のヌとネエの対立から、現代東京語のナイとネエの対立につながる過程を示していると解釈する。さらに、標準的な文体を担うという点で、ヌとナイは、ネエに対立する形式として等価であったことを女性のヌとナイ併用話者の調査を通して明示し、ナイの台頭には、上方語由来のヌが持つ上方威信の減衰の関与が窺えることを指摘している。

第5章では、漢語名詞における e: 形式使用について論じている。『浮世風呂』に反映された言語では、「(「大学（だいがく）」や「二階（にかい）」などの) 漢語名詞は、e: 形式であられる。しかし現代東京語では、漢語名詞では e: 形式から ai 形式に回帰している。つまり『浮世風呂』において e: 形式化しやすい言語的環境にあったものが、e: 形式化しにくくなるという変化を起こしている。この章では、『浮世風呂』と『花暦八笑人』における ai 形式と e: 形式全体の使用数を調査し、両資料間で漢語名詞の e: 形式の使用に著しい差がみられることを指摘する。『浮世風呂』と比べ『花暦八笑人』では、すでに漢語名詞の e: 形式使用が減少して ai 形式に回帰していた。このことから、e: 形式漢語名詞の縮小は、明治の漢語大流行や標準語の成立等が直接的な契機になったという先行研究の解釈は不十分で、むしろ明治以前、『花暦八笑人』に反映された言語で既に縮小の方向にあったと仮定している。次に、漢語名詞を含めた名詞全体での ai 形式への偏りについて述べ、『浮世風呂』でさまざまな言語的環境にみられた e: 形式が、『花暦八笑人』では形容詞や助動詞に限定され、局所的な使用へと変容したことを明らかにする。

終章では、全体の議論のまとめと今後の課題及び展望について述べる。これまで日本語史の研究に不足していた社会言語学的観点からの分析や考察が重要であることを、本論文の成果からも提言する。

## 審査の結果の要旨

本論文が中心として考察している近世後期江戸語の接続母音の長母音化については、日本語音韻史の観点から文献資料での実態調査・報告が既に多くなされている。それらの中でも、語種や階層を区別し変化の実態を考察したものも存するが、近世語から現代語への体系的な変遷としてとらえた研究は少なく、本論文が先行研究として重視する福島直恭（2002）が、社会言語学的観点を用いて話者の社会階層と語彙の区分をし、接続母音 ai から長母音 e: への変遷を動的にとらえたものとして評価されている。そして本論文は、この福島（2002）の中で例外扱いされていた助動詞ナイに注目し、「上方の威信」を有する助動詞ヌとの関係から『浮世風呂』『浮世床』の実態をあらためて調査し、別のかたちで変遷の中へ位置づけた意欲的な論文（本論文の第3章）がその中心となっている。この論文は、日本語学会の機関誌『日本語の研究』（第2巻2号 2006.3）に掲載され、学界においても高く評価されたものである。

本論文ではさらに、『浮世風呂』『浮世床』以後の助動詞ナイのネエからの回帰について、『春色梅兎誉美』などの文献調査をもとに性差との関係を重視する新見を提示する（第4章）。また、福島（2002）では明治以後ととらえている漢語名詞における e: から ai への回帰についても、『花暦八笑人』など江戸期の文献からすでに回帰の動きが始まっていることを指摘し、その要因を推定している（第5章）。いずれも、丹念な文献調査に裏付けられた考察であり、福島（2002）が示した研究を修正・深化させたともいえる説得力の高い内容を持った論文である。

このように先行研究を推し進めた論考であることは、いっぽうでは先行研究の成果に負った部分が多く残されていることをも示している。これはけっして本論文の評価をおとしめるものではないが、先行研究による用語の使用や語彙の区分についても、今後の著者自身の研究の深化発展によってより適切な用語や区分を独自に設定する必要があることを予想させる。このことについては、著者自身も終章の課題の中で述べていることでもある。また、現代日本語への変遷を視野に入れているものの、具体的な調査考察までには至っていない点、ai > e: 以外の長母音との関連、助動詞ナイ・ヌの文法的な機能からの考察など、本論文での成果をもとにさらに考察すべき重要な課題が残されているが、著者の今後の研究の深化発展によって解明されていくことが期待できる。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。